

トマス・ハーディ『カスターブリッジの市長』に見る 聖書引用の諸相と機能

戸恒 三恵子

日本大学大学院総合社会情報研究科

Aspects and Functions of Biblical Quotations in Thomas Hardy's *The Mayor of Casterbridge*

TOTSUNE Mieko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Thomas Hardy often used some biblical quotations which can be found in his novels. Here my concern is to make it clear that knowledge of the Bible is required for the interpretation of Hardy's novels. The aim of this paper lies in sifting through biblical quotations in *The Mayor of Casterbridge* to show the necessity of understanding of the Bible. I begin with sorting out the biblical quotations and try to demonstrate how they function in the story.

1. はじめに

トマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) の作品の中に次のような引用がある。

- (a) "Three Leahs to get one Rachel," he whispered.
(*Tess of the D'Urbervilles*, p.202)¹
- (b) Finding that her shorn Samson was asleep she entered to the bedside and stood regarding him.
(*Jude the Obscure*, p.457)²
- (c) "You may as well look for manna-food as good bread in Casterbridge just now, ..."
(*The Mayor of Casterbridge*, p.30)³

(a)は Leah も Rachel も「創世記」29 章に出てくる姉妹であり、(b)の Samson は士師の一人で「士師記」

16 章に登場する怪力の士師 (裁きづかさ) である。(c)の manna は「出エジプト記」16 章で主が民に授けた食べ物のことである。

いずれもコンテキストにより、おおよその意味を想像することはできるものの、作品解釈を試みるためには次の二点を把握しておく必要を感じたのが本研究の契機となった。

(1) 聖書から引用された言葉や物語を読み手が知っていることの重要性。

たとえば、(a)の「一人のラケルを手に入れるには三人のレア」という表現は聖書の知識がない場合、字義通りに受けとめるだけでは読み手にはよく伝わらない。「創世記」29 章によれば、働き者のヤコブがラバンの娘のラケルと結婚をしようとするが、その国では姉 (レア) より先に妹 (ラケル) が結婚することを禁じていると姉妹の父親に言われ、レアと結婚することになる。その後、最愛のラケルと結ばれるという話である。『テス』では、牧師の家庭に育ったエンジェル・クレア青年が、大水が出て川を渡れなくなっている若い女性 4 人のうち 3 人を一人ずつ渡してあげ、最後に愛するテスを抱きかかえてさ

¹ Thomas Hardy, *Tess of the D'Urbervilles*, Penguin Classics, 1985.

² Thomas Hardy, *Jude the Obscure*, Penguin Classics, 1985.

³ Thomas Hardy, *The Mayor of Casterbridge*, Penguin Classics, 2003.

さやく言葉である。聖書の話の中に三人のレアがいるのではない。読者がこの聖書の物語を知っていて作品を読むのと、知らないで読むのとでは大きな違いがある。

(2) 聖書からの引用が作品の中でどのように機能しているかを検証することの重要性。

(c)『カスターブリッジの市長』では、店で売っているパンの味よりもマナのほうがまだましであることを意味している。不作だった小麦で作られたカスターブリッジのパンのひどさを言い表そうとしたのである。しかし、(b)『ジュード』の、神に聖別されたサムソンは英雄的存在であったが、美の魅力に酔いしれているうちに、「髪を切られると力が萎えてしまう」という秘密を、ペリシテ人の女性にもらしてしまい、怪力を失う。それでもなお、サムソンは彼を笑いものにしたペリシテ人を最後の力で滅亡させ、自らも滅んでいく。サムソンの物語を、夢のかなわぬジュードが滅んでいく姿になぞらえていると思われる。

本稿の目的はトマス・ハーディの作品解釈に際しても聖書の知識が必要であることを確認することにある。筆者は、ハーディの『カスターブリッジの市長』をとりあげ、本作品における聖書引用の事実を整理し、それぞれの引用がどのような機能を果たしているかを検証していく。

なお、*The Mayor of Casterbridge*に見られる聖書からの引用はAuthorized Versionに基づいていることを確認し得たので、本稿で使用する英訳聖書は*The Bible: Authorized King James Version* (Oxford World's Classics, 1997)とした。*The Mayor of Casterbridge*における聖書引用に関してはKeith Wilsonの注釈⁴を参考にした。

2. *The Mayor of Casterbridge* に見る聖書引用の実例

(1)

“But I know that ‘a’s a banded teetotaler, and that if any of his men be ever so little overtook by drop,

⁴ Keith Wilson ed., Thomas Hardy, *The Mayor of Casterbridge*, Penguin Classics, 2003, p.323-370.

he’s down upon ‘em as stern as *the Lord upon the jovial Jews*.”⁵ (Chap. 5, 35)

‘*the Lord upon the jovial Jews*’はExod.32(「出エジプト記」32章)から引用されたものである。

「出エジプト記」32章においては、モーセが神との対話のためにシナイ山へ登って留守のとき、イスラエルの民はモーセがなかなか戻ってこないで、アロンに頼んで金の子牛を造ってもらって拝む。神は憤り、民を罰しようとするがモーセの説得で思いとどまる。しかし、モーセが実際に下山し、民の陽気に飲み食いして騒いでいる様子を見て、自らの手でイスラエル人を罰する。

本作品内では、カスターブリッジの市長の座に着いているヘンチャードが盛大な宴会を催している場面で用いられている。彼のグラスには水しか入っていないし、誰も酒を勧めようとしめない。禁酒を誓ってから20年近くたっている。この語りは町の長老ソロモン・ロングウェイズが、ヘンチャードは自分に対しても厳しく、使用人に対しても飲酒を厳しく戒めていることを怒りの神のようであると譬えている。主人公ヘンチャードの非常にかたくなで憤りやすい性格を描写している。

(2)

He (Farfrae) was *fair and ruddy*, bright-eyed, and slight in build. (Chap.6, 37)

And he sent and brought him in. Now he was ruddy, and withal of a beautiful countenance, and goodly to look to. And the Lord said, Arise, anoint him: for this is he. (I Sam. 16:12)

And when the Philistine looked about, and saw David, he disdained him: for he was but a youth,

⁵ *The Mayor of Casterbridge*, Penguin Classics, 2003. 以後、同書からの引用において、()内は(章、ページ)を表す。聖書引用に相当する部分は斜字体とする。以後、英訳聖書の書名は全て短縮形を使用、その一覧表は文書末に記す。

and ruddy, and of a fair countenance.

(I Sam. 17:42)

ファーフレーはアメリカに行って一旗あげようとしていて、偶然カスターブリッジに立ち寄ったスコットランドの青年で、ダビデになぞられる。

ruddy や fair、tall や strong は青年男女のほめ言葉として好んで用いられる。

‘fair and ruddy’という言葉は、ファーフレーもダビデのように立派な外見の若者であることの象徴的表現として引用されている。

(3)

The new-comer stepped forward like the quicker cripple at *Bethesda*, and entered in her stead.

(Chap.10, 64)

Now there is at Jerusalem by the sheep market a pool, which is called in the Hebrew tongue Bethesda, having five porches. (John 5:2)

物語ではヘンチャードの経営する穀物問屋の事務所をベトザダに譬えている。

「ヨハネによる福音書」によれば、‘*Bethesda*’ (ベトザダの池) に主の使いが時々降りてきて、水が動くことがあると記されている。水が動いたときに最初にはいった者はどんな病気も癒されるという池である。病に苦しむ多くの人々がその池に入りたいと思い五つの回廊の中で待っているのである。

エリザベス＝ジェインはヘンチャードに会うために事務所に入ろうとしたが、一步先に新米の客に入られてしまい、自分の番をじっと待っている。やがて、その客が出てきたので、ジェインは自分の番がきたことを喜ぶ。

この池に最初に入った新米の客はヘンチャードに冷たくあしらわれている。他方、ジェインは、38 年間待って「ベトザダの池」に入らずにイエスに癒された人と異なって、「ベトザダの池」に譬えられている事務所に入れる喜びを覚えてそこに入る。だが、事務所に入った彼女はそこで癒されたのだろうか。

(4)

The poor woman smiled faintly; she did not enjoy pleasantries on a situation into which she had entered solely for the sake of her girl's reputation. She liked them so little, indeed, that there was room for wonder why she had countenanced deception at all, and had not bravely let the girl know her history. But *the flesh is weak*; and the true explanation came in due course. (Chap.13, 80)

Watch and pray, that ye enter not into temptation: the spirit indeed is willing, but the flesh is weak.

(Matt.26:41)

‘*the flesh is weak*’ (「肉体は弱い」) は、オリーブ山でイエス・キリストの受難が始まろうとしているときに、イエスはペテロ、ヤコブ、ヨハネを傍らに呼んで、ことの次第をよく見ているようにという場面に見られる。しかし、3 人の弟子たちはイエスが父なる神への祈りを唱え、受難の苦しみに悶えているときに、寝てしまう。そのような弟子たちに対してイエスが戒めた言葉である。

「肉体は弱い」の引用文は薄幸を絵に描いたようなスーザンが前夫ヘンチャードの元へ再び戻ってきた行為を言い当てたのである。スーザンは「妻の売買」を許せないと思いつつ売られていき、許せなかった男の元に戻ってきてしまう。娘ジェインには自分の恥ずべき過去を決して話すまいと思っけていても、いよいよ話さなければならないときがきたと感じる。カスターブリッジにやって来たのは裕福になっている前夫と、立派な家具に囲まれて暮らしたいと思っけてのことではなかったにもかかわらず、ヘンチャードに改めて結婚を申し込まれると、断ることもできず市長の屋敷で暮らす生活に甘んじているのである。やがて自分に開かれていた生を自然に閉じていくようにこの世を去っていく。「肉体は弱い」は意志の弱い、誘惑に陥りやすいスーザンの性格、ひいては人間性の実相を形容している。

(5)

Like Jacob in Padan-Aram, he would not sooner

humbly limit himself to the ringstraked-and-spotted exceptions of trade, than the ringstraked- and-spotted would multiply and prevail.

(Chap.17, 112)

‘*Jacob in Padan-Aram*’という表現は「創世記」30章に記されている物語から引用されている。

ヘンチャードはスコットランドの青年ファーフレーの手腕にほれ込んで穀物問屋の支配人に雇い入れたのであった。ファーフレーはヤコブのような判断力と決断力で取引が増えていった。しかし、人々の信用はヘンチャードからファーフレーへと移っていき、ヘンチャードの機嫌を損ねてしまう。二人の友情はさめ、やがてはヘンチャードの逆恨みで、ファーフレーは解雇される。幸運にも青年は主人から遠く離れたところに小さな店を構えることができる。かつての主人に気を使いながら商売をするが、客は、たとえ遠くても、優しく賢いファーフレーのところへ足を運ぶようになり、ファーフレーの店は大繁盛する。カスターブリッジの新時代到来を暗示させるような場面となる。

聖書のパダン・アラムのヤコブは実利的である。ヤコブは狩猟好きの兄エサウからやんわりと長子としての権利を手に入れる。また、兄に対する父イサクの祝福を横取りもする。それを知った兄はヤコブを殺そうとしたため母親の兄が住んでいるパダン・アラムに逃亡したのである。そこの農場で仕事に励み、たくさんの子供に恵まれ、敬虔に暮らす。おじのラバンはヤコブに仕事の報酬を問うと、少しの家畜を要望するだけであった。しかし、どのような家畜でも強く丈夫な家畜を増やせることを発見し、ヤコブは財を成していく。

ファーフレーも同じである。消費者の意識、生産技術の進歩、帳簿記帳の重要性など進取の精神に富み、主人であったヘンチャードに対する恩義を考慮しつつ、自分に有利であると思うことは行動に移していく。このようなファーフレーの事業の手腕を、パダン・アラムで成功したヤコブに譬えたものである。その後、ラバンがヤコブを恨んで、激怒して追いかけてくるのもまさにヘンチャードと同じである。

(6)

She tried to stand up and confront him trustfully; but she could not; *she was troubled at his presence*, like the brethren at the avowal of Joseph.

(Chap.19, 121)

And Joseph said unto his brethren, I am Joseph; doth my father yet live? and his brethren could not answer him; for they were trouble at his presence.

(Gen. 45:3)

ヘンチャードも、聖書におけるヨセフも、共に驚くべき事実を告白する場面である。ヨセフの父ヤコブは子宝に恵まれたが、最愛の妻にはなかなか子供ができなかった。ヤコブが高齢になってから生まれたのがヨセフであり、眼に入れても痛くないほど可愛がる。兄たちはそんなヨセフを憎み、殺そうとさえする。ある日、ヨセフは兄たちが元気に羊を飼っているかどうか見てくるようにヤコブに言われる。すその長い服を着てやって来たヨセフを見ていた兄たちは、服を剥ぎ取り穴の中に入れて殺そうとする。兄たちが食事をしているあいだに、偶然通りかかった商人が、ちょうどやって来た隊商のエジプト人にヨセフを売り渡してしまう。兄たちはヨセフがいないのに驚き、剥ぎ取った服を獣に食いちぎられたように仕組んで父ヤコブに知らせる。

もう、ヨセフのことなどすっかり忘れてしまったころ、ヨセフはエジプトで王に次ぐ地位に就いていた。国中が飢饉に襲われたとき、国の食糧を管理していたヨセフのもとに兄たちが買いにやって来た。そこで、ヨセフは身を明かし、兄たちを驚かすのである。

ジェインは、ヨセフの兄弟と同じように、ヘンチャードから過去の事実を聞かされる。‘*she was troubled at his presence*’は想像すらしていなかった事実が目前で突如として明かされたときの精神的動揺の大きさを効果的に表出する引用である。

(7)

... one grievous failing of Elizabeth's was her occasional pretty and picturesque use of dialect

words – those terrible *marks of the beast* to the truly genteel. (Chap.20, 127)

And that no man might buy or sell, save he that had the mark, or the name of the beast, or the number of his name. (Rev.13:17)

ヘンチャードは妻スーザンの遺書により、エリザベス＝ジェインは自分の娘ではないことを知る。スーザンを金で買い取った男ニューマンの娘であった。そのため、ヘンチャードのジェインに対する態度がにわかに冷ややかになる。彼は父親に対する娘の言葉遣いというよりも市長の地位にある人に対する言葉遣いの悪さをジェインに厳しく注意する。ヘンチャードに「獣」と言わせた言葉は次の会話である。

---she happened to say when he was rising from table, wishing to show him something.

“If you’ll bide where you be a minute, father, I’ll get it.”

“ ‘Bide where you be,’ ” he echoed sharply. “Good G---, are you only fit to carry wash to a pig-trough, that ye use such words as those?”

She reddened with shame and sadness.

“I meant ‘Stay where you are,’ father,” she said, in a low, humble voice. “I ought to have been more careful.”(127)

……彼が立ち上がろうとしたとき、彼女はつい好意を示したくなって、こうやってしまった。

「そこで待ってよ、お父様、あたしお取りしますから。」

『そこで待ってよ、』だと？」彼は鋭く言い返した。「こりゃ、お前が、そんな言葉を使うなんて、残飯を豚の餌箱に運ぶのに向いているかな？」

彼女は恥ずかしさと悲しさのあまり真っ赤になった。

「あたし、『そのままでいらしてください』というつもりでした、お父様。」彼女は力のない、控え目な声で言った。「もっと気をつけるべきでし

たわ。」⁶

また、仕事上でも契約文書の代筆をジェインに依頼する場面があるが、ジェインの丸みのある太い字に対して、ヘンチャードは女性らしい上品な書体ではないと憤慨し、ジェインに対して書いている途中で彼女を部屋から追い出してしまう。さらに女中に対するジェインの下手に出る態度にも怒鳴り散らす。上品な人々の部類に入っているヘンチャードにとっては、ジェインの一举一動が「黙示録」の ‘*the marks of the beast*’ (「獣の刻印」) を押された者のように思われたのである。

しかし、「黙示録」の *beast* はジェインには当てはまらない。聖書に登場する 2 匹の獣はいずれも神をことごとく冒瀆し、悪を振りまく。ジェインは知識を得ようと絶えず読書に精を出し、ノートに書き留めるなどの努力を重ね、さまざまなことを習得していく。自分に課した仕事も決しておろそかにしない。そういった日常の姿が信仰心とつながるかどうかは別としても、ジェインは *beast* に打ち勝つような忍耐力、不屈の精神を持っている。むしろ、獣の刻印に相対する「神の刻印」に譬えてもよいであろう。獣といえるのはむしろヘンチャードのほうである。些細なことにすぐ激怒し、身分の低いものに頭を下げることを恥とし、土地に根ざした豊かな方言の使用を軽蔑する。語り手は「獣の刻印」をジェインではなくヘンチャードにおいて上流階級の間違った考え方を次第に強めていくその変化を表現するのに用いている。

(8)

Not the least amusing of her safeguards was her resolute avoidance of a French word, if one by accident came to her tongue more readily than its English equivalent. She shirked it with the suddenness of the weak Apostle at the accusation, “Thy speech bewrayeth thee!” (Chap.22, 149)

⁶ トマス・ハーディ『カスターブリッジの市長』、上田和夫訳、潮出版社、2002、192 ページ。

And after a while, came unto him they that stood by,
and said to Peter, Surely thou also art one of them;
for thy speech bewrayeth thee. (Matt.26:73)

ルセッタ・テンブルマンという美しい女性がヘンチャードを訪ねてカスターブリッジにやって来る。ヘンチャードが商用でジャージー島に行ったときに知り合った女性である。そのころのルセッタはすでに両親と死別し、貧しく孤独な生活を送っていた。そのような寂しさも手伝って、偶然同じところに居合わせたヘンチャードに魅力を感じ、積極的な行動に出たのだった。

ところで、その島の公用語は英語とフランス語で、ルセッタはフランス語を話していた。彼女はヘンチャードが妻を失ったので再婚できると知り、カスターブリッジにやって来たのであるが、ジャージー島ではなく「バースから来たご婦人」ということになっていた。貧しかったかつてのジャージー島でのこと、フランス語を話していたことをひたすら隠そうとしていた。しかし、隠そうとすればするほど、何気ないときにふとフランス語が口をついて出てしまうのである。

“*Thy speech bewrayeth thee!*”（「言葉遣いでそれがわかる」）というのはイエスが死刑になろうとしているときに使徒ペテロがイエスの仲間だと嫌疑をかけられる。ペテロが知らないと言い張ったので、周りにいた人々が言った言葉である。自分も十字架にかけられてはたまらないと嘘を突き通すペテロに似て、カスターブリッジの人々にレディーと見られたいために、都合の悪いことを隠し通すルセッタの弱さを強調している引用である。

(9)

“It will revolutionize sowing hereabout. No more sowers flinging about their seed broadcast, so that some falls by the wayside, and some among thorns, and all that.” (Chap.24, 168)

‘sowers’（「種を蒔く人」）のたとえば「マタイによる福音書」13章、マルコ4章、ルカ8章と、いずれもほぼ同じ内容で出てくる有名な話である。種蒔き

に出て行った人が、道端や石だらけで土の少ないところや茨の中に落とした種と、良い土地に落ちた種がどのように育っていくかを語りかけている。

カスターブリッジの農業が機械化されていく様子に関連して聖書のたとえ話を引用している。派手な色をした新しい種蒔き機が街にやってきたので、ファーフレーはもちろん機械に見入っていた。引用文は機械を見学にやって来たルセッタとジェインに彼が興奮した口調で聖書のたとえ話を引き合いに出して言った言葉である。しかし、聖書の「種」の真意は神の御言葉である。道端に種を落とす人は神の御言葉を聞いてもすぐにサタンが来て、せっかくの蒔かれた御言葉を奪い取られてしまうことであり、茨の間に落とす人は神の御言葉を聞くがこの世の思い煩いや富の誘惑、その他いろいろな誘惑が入り込み、御言葉を覆いふさいで、実らない人である。ヘンチャードのやり方はかごからヘラでばら撒くという旧態依然としたものであり、無駄が多い。最新の機械を使用すれば道端にまでばらまくこともなく、茨の間に落とす心配もなく、収穫量は今までの数十倍、数百倍を期待できるということを強調するための聖書引用である。

文明の利器がカスターブリッジにやってきた喜びはこの表面的な聖書引用によって強調されるものの同時に農業の歴史の転換期における明暗がはっきりと出てくる。聖書をよく読んでいるジェインがファーフレーに、“*Then the romance of the sower is gone for ever.*”とすかさず言葉を返すが、この言葉にも新時代の到来が表れている。さらに、ファーフレーが農業機械をじっくり見ていたのに対して、ヘンチャードはこの機械を一瞥しただけですぐに立ち去ってしまう。農夫と農場経営者の対比が「種を蒔く人」の譬えによって明確に描かれる場面である。

(10)

They sat stiffly side by side at the darkening table, like some Tuscan painting of the two disciples supping at *Emmaus*. (Chap.25, 180)

エマオ（ルカ24章13-35）はイエスが磔刑後に最初に姿を現した場所である。イエスであるとは知ら

ずに、エマオの二人の弟子は日が暮れるので、泊ま
っていくように強く勧め、一緒に食事をする。

このエマオでの夕食の場面をカラヴァッジョが描
いていると思われるが、筆者は ‘some Tuscan
painting of the two disciples supping at Emmaus’の絵は
他ならぬカラヴァッジョの『エマオの夕食』である
と考える⁷。

ハーディは、ヘンチャードとファーフレーを二人
の弟子に、ルセッタをイエスに譬えている。絵画を
鑑賞しているのはジェインである。

物語のこの場面はヘンチャードがルセッタの心変
わりを察知して、彼女の結婚相手がファーフレーで
あるのかを確かめようとしているのである。緊迫し
た場面には違いないが、二人の弟子がエマオ村でイ
エスと夕餉を共にする厳粛で神聖な雰囲気とは言い
難い。ルセッタは都合の悪い過去を隠し、ヘンチャ
ードを捨て、ファーフレーをわがものとして、ファ
ーフレー市長夫人へと、社会階級をひとつ上げた女
性である。しかし、その後も自分の過去はもちろん、
ファーフレーがかつてはヘンチャードの使用人であ
ったこともひた隠すのである。

では、なぜルセッタをイエスの位置に配したので
あろうか。ひとつにはカラヴァッジョの絵にある。
そこに描かれたイエスは「顔が若い」、「赤い服に白
布」をまとい、卓上の「ご馳走」、さらに強烈な明暗
の配色のしかたなど、従来の宗教画に見られるイエ
ス・キリストの宗教的雰囲気は出ていない。そのた
めイエスにルセッタを重ね合わせても違和感はない。
また、物語全体の構成を考えたときのルセッタの生
涯を「神の義」の現出と見るができるならば、
虚栄心のために過去を隠す不誠実さの罰として土地
の人々になぶりものにされてショック死をする（39
章）という結末を迎えることになることも得心でき
るのである。

(11)

⁷ カラヴァッジョ作『エマオの夕食』(1501-2)、139×
195、ナショナルギャラリー・ロンドン蔵。
Thomas Hardy, *The Personal Notebook of Thomas Hardy*,
ed., Richard Taylor, p.107.

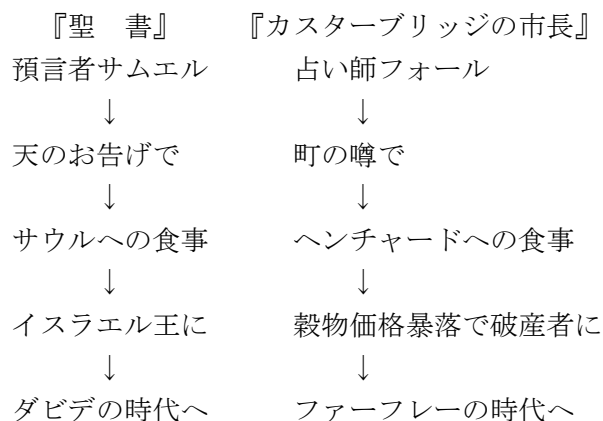
He threw open the door and disclosed the
supper-table, at which appeared a second chair,
knife and fork, plate and mug, as he declared.

Henchard felt like Saul at his reception by
Samuel. (Chap.26, 185)

サウルは「サムエル記」上の9章に登場するイス
ラエルで最も美しく、長身の若者である。サウルの
父が、数頭のロバが見当たらないので若者を一人付
けて、捜してくるようにとサウルに言う。サムエル
のところへ彼が行くと、ロバは見つかったので捜す
必要はない、全イスラエルの期待が今、サウルにか
かっているとされる。さらに食事の用意もすでに
準備してあったのでサウルは驚く。サムエルはサウ
ルが来る前日に彼をイスラエルの指導者とせよとい
うお告げを聞いていたので王にするべく用意万端整
えておいたのである。

物語では、ヘンチャードが誰にも気づかれないよ
うに夜遅く占い師に天気を占ってもらいに行くが、
食事の準備までしてあったので驚く場面である。前
回の穀物取引で天気の予想が大きく外れ、大損害を
被ったヘンチャードは今度こそはと思い、占い師フ
ォールを頼ることにする。この占い師は落ちぶれた
ヘンチャードが自分の所へやって来ることを見透か
していた。落ちぶれたとはいえ財産はまだあるはず
だと踏んで食事を用意したのである。しかし、この
占い師の予想は見事に外れ、ヘンチャードの栄光の
地位は全て過去のものとなっていく。

サウルとヘンチャードを図示するならば下のよう
になる。



このように、栄光とそこから転げ落ちるヘンチャードと彼にとって代わるファーフレーを、聖書に記されているサウルの栄光と彼にとって代わるダビデの台頭になぞらえているのである。サウル＝ヘンチャード、ダビデ＝ファーフレーという寓意的な人物設定によって、ハーディは適者生存の物語を展開しているのである。

(12)

...a sticky black bonnet that seemed to have been worn in the country of the Psalmist where the clouds *drop fatness*; ... (Chap.28, 198)

Thou crownest the year with thy goodness; and thy paths *drop fatness*. (Ps.65:11)

「詩篇」第65篇は感謝の祈りであり、肥沃な土地の広がるこの地方にはぴったりの引用であるかに見える。

この場面は裁判所内での事件審議中の様子である。ヘンチャードは市長と同時に治安判事のような仕事もしていたのだが、‘*drop fatness*’（「滴る油」）は事件を起こした老婆の黒光りした帽子を、聖書の詩篇におけるダビデの国の帽子のようだと形容している。しかし、ここで老婆が裁かれるのは当然であるが、治安判事が裁かれてしまうスキャンダルがこの場に待ち受けている。この老婆はヘンチャードが妻を売り飛ばしたときに粥の中にラム酒を入れて飲ませた粥売り女であった。満座した人々の前で人を裁く場所が、ひたすら隠し通してきた治安判事の忌まわしい過去が暴露される場所と化してしまう場面である。詩篇から美しい情景を引用しておきながら、地獄へ突き落とすペリペティアをしつらえているのである。

(13)

“I am full of gratitude to you – you have saved my life. And your care of me is like *coals of fire on my head*.” (Chap.29, 208)

Therefore if thine enemy hunger, feed him; if he thirst, give him drink: for in so doing thou shalt

heap coals of fire on his head. (Rom.12:20)

ルセッタは半ば脅迫された形でヘンチャードとの結婚を承諾してしまう。その後、裁判審問で老婆に暴露された醜聞は町中に知れ渡る。ルセッタはそのようなヘンチャードから遠ざかろうとするが、偶然牛に襲われヘンチャードに命を助けてもらう。この時、ヘンチャードはルセッタに打ち解けて結婚の話をし始めるが、ルセッタはすでにファーフレーと結婚の約束をしている。そうとは知らないヘンチャードに結婚を断れずにいるルセッタの心情の吐露である。

‘*coals of fire on my head*’（「私の頭の上に炭火を積むようなもの」）というのは「私に本当のことを言わせるようなもの」であり、つまり、「私はあなたと結婚をするつもりはないと言わせること」なのである。

しかし、聖書における「燃えている炭を頭に積み上げる」とは、全てのものに対する神の平等な愛を意味し、悔い改めることを信頼して待つということであるが、ルセッタの発した言葉には、「頭上の炭火」だけが強調されている。それは次のルセッタの言葉でも明らかである。

And then, when I had promised you, I learnt of the rumour that you had – sold your first wife at a fair, like a horse or cow. How could I keep my promise after hearing that? I could not risk myself in your hands; it would have been letting myself down to take your name after such a scandal. (Chap.29, 209)

ルセッタはヘンチャードのかつての不面目な行為に対して信頼して待つことができなくなり、世間体を第一と考える彼女にとって、一刻も早くヘンチャードと手を切りたいと思っているのである。実際の燃え盛る炭火を頭上におかれたら、熱くてすぐにも本心を白状するという拷問的行為のみを強調するために引用したといえる。

(14)

“The two lovers – the old and the new: how she

wanted to marry the second, but felt she ought to marry the first; *so that the good she would have done she did not, and the evil that she would not, that she did – exactly like the Apostle Paul.*” (Chap.30, 212)

For the good that I would I do not: but the evil which I would not, that I do.

(Rom. 7:19)

ルセッタはファーフレと結婚の約束をし、ヘンチャードと手を切ることができた。次は自分の最も身近にいるジェインに話さなければならない。以前ファーフレと恋仲であったジェインに結婚相手のことを話すには勇気が必要だった。話の核心になかなかどりつけないでいるルセッタに、ジェインは聖書の言葉を用いてはっきりさせようとする。

ジェインはルセッタに二番目の人と結婚したいのに、一番目の人と結婚をすべきだと感じていることを確認をした上で、「自分の望む善を行わず、望まない悪を行っている」というパウロの譬えにぴったりと当てはまると言う。つまり、ヘンチャードと結婚の約束をしておきながら、ファーフレとの結婚を望んでいることをジェインが非難しているのである。しかし、ルセッタの行おうとしている罪について言うならば、「ローマの信徒への手紙」7章3節の *So then if, while her husband liveth, she be married to another man, she shall be called an adulteress.* のほうが、より明確である。学問的な自己修養に励もうとするジェインの性格を強調したものである⁸。

(15)

Over this repentant, at least, there was to be no joy in heaven. (Chap.40, 83)

I say unto you, that likewise joy shall be in heaven over one sinner that repenteth, more than over ninety and nine just persons, which need no repentance.

(Luke 15:7)

⁸ Keith Wilson ed., Thomas Hardy, *The Mayor of Casterbridge*, (p.355)

ヘンチャードはやることなすこと失敗に終わり、非難を浴び、心がすさんでいくばかりである。21年間の禁酒も止め、向こう見ずな生活が再び始まる。ファーフレとルセッタが腕を組んで通り過ぎるのを見て、詩篇第109篇（神に欺く者の悪意に満ちた歌）を歌い始める場面もある。今や身分は逆転し、ヘンチャードがファーフレの使用人になり下がっていた。ルセッタは、卑屈な態度をあらわにするヘンチャードに精神的苦痛を味わい、さらに「お馬なぶり」(skimmity-ride, skimmington)と呼ばれる夫婦間の不義を冷笑するどんちゃんさわぎの行列のターゲットにされ、卒倒し危篤状態となる。その様子を知ったヘンチャードはファーフレに伝えるが信じられないと背を向けられる。

聖書では、「悔い改めた一人の罪びと」のほうが悔い改めの不必要な99人の正しい人よりも大きな‘joy in heaven’（「喜びが天に」）あると譬えている。だが、実際、一人の罪びとヘンチャードの悔い改めに天の喜びは全くなかったのである。ここでは聖書のたとえ話の真意を意図的に曲解して用いられていることになる。

(16)

I – Cain – go alone as I deserve – an outcast and a vagabond. But my punishment is not greater than I can bear. (Chap.43, 307)

And Cain said unto the Lord, My punishment is greater than I can bear. (Gen.4:13)

主人公ヘンチャードはジェインに自分の娘でないことをまだ知らせていない。それどころかジェインが事実を知らないままで、自分の娘にしておきたいと強く望むあまり、ヘンチャードを訪ねてきたニューマン（ジェインの実の父）に、スーザンもジェインも亡くなったと嘘をついてしまう。しかし、ニューマンによって事実を知らされたジェインはヘンチャードを厳しい態度で責める。ヘンチャードは絶望的となり、カスターブリッジから立ち去る決心をする。歩いている途中に立ち止まり、自分はカインと同じだとつぶやく場面である。

聖書ではアダムとイブの長子カインが弟を嫉んで殺してしまう。主に呪われた者とされ、地上を一生さまよい続けるだろうと言われると、カインは罰の重さに耐えられないという。しかし、ヘンチャードは‘*my punishment is not greater than I can bear*’（「罰の重さに耐えられる」）と言う。「創世記」4:13)の引用もまた聖書を意図的に曲解して用いていると言える。

(17)

All was over at last, ...Elizabeth-Jane found herself in a latitude of calm weather, kindly and grateful in itself, and doubly so after the *Capharnaum* in which some of her preceding years had been spent.

(Chap.45, 322)

And leaving Nazareth, he came and dwelt in Capernaum, which is upon the sea coast, in the borders of Zabulon and Naphthalim.

(Matt.4:13-23)

聖書のカペナウムはガリラヤ地方の湖畔にある町で、イエスが伝道を行うためにそこに住み、多くの奇跡を行い、最後には、甦りの姿を見せた場所である。ジェインは数奇な運命に翻弄されながら、最後によりやくファーフレーとともに生きていく喜びに浸ることができる。ジェインの育った海辺の町を懐かしく思い出しながら、ガリラヤ湖畔にあるイエスが住んでいたカペナウムの町に重ね合わせて『カスターブリッジの市長』の締めくくりとして引用されている。

3. 結語

まず第一に、*The Mayor of Casterbridge* における引用の形式はほとんどが‘like Job’というような直喩である。

... when the world seems to have the blackness of hell, and, like Job, I could curse the day that gave me birth.

(Chap.12, 77)

like Job がなくても物語の流れが止まることはない。しかし、like Job を入れることによってヘンチャードの精神的な苦しみを「ヨブ記」の恐ろしい苦しみまで高める機能を果たすことになる。「ヨブ記」の内容を知る読み手には、ヘンチャードの苦しみは少し大げさに受け取られるかもしれないのであるが。

The new-comer stepped forward like the quicker cripple at *Bethesda*, and entered in her stead.

(Chap.10, 64)

これも同じようにベトザダを引用して、ヘンチャードの事務所に一刻も早く入りたいが先客に入られてしまい、ジェインを 38 年間も待っていた人に譬えている。入りたい気持ちを非常に強調している。

さらに、聖書の *Capharnaum*(Chap.45, 322)は物語の最後の地であり、これを引用することによって『カスターブリッジの市長』の終幕を象徴するために引用されている。

第二に、登場人物の性格を描き、より具体的な人物像を把握できるように聖書引用が機能している。たとえば、‘*the Lord upon the jovial Jews*’(Chap.5, 35)と‘*marks of the beast*’(Chap.20, 127)に現れるのはヘンチャードの頑なで激しやすい性格である。また、‘*fair and ruddy*’(Chap.6, 37)ではダビデの象徴として、健康的でたくましい英国青年ファーフレーを表している。また、‘*the flesh is weak*’ (Chap.13, 80)と ‘*Thy speech bewrayeth thee.*’ (Chap.22, 149)は聖書のたとえ話を使って、前者は運命に逆らわずに生きようとするスーザンの、後者は運命を切り開いていこうとするルセッタの性格を描いている。さらに、‘*so that the good she would have done she did not, and the evil that she would not, that she did*’ (Chap.30, 212)の引用は、エリザベス＝ジェインの書物を通して自己研鑽に励もうとする性格をうかがい知ることができる。

第三に登場人物の対比に際し聖書が引用されている。

‘*Jacob in Padan-Aram*’ (Chap.17, 112) では人物の対比がはっきりしている。ファーフレーの落ち着いた実務処理のやり方に対して、それを見ているだけで、何も変えようとしないうヘンチャードとの対比が

明瞭である。また、同じように ‘No more sowers flinging about their seed broadcast, so that some falls by the wayside, and some among thorns, and all that.’ (Chap.24, 168) の引用も、いち早く新しい農業機械を見て、導入することにしたファーフレーと一瞥して去って行ったヘンチャードの対比に機能している。

第四に、大きな場面展開の暗示に聖書が引用されている。

たとえば、想像もしていなかった事実を知らされる場面に遭遇した驚きを表すのに、‘she was troubled at his presence, like the brethren at the avowal of Joseph.’ (Chap.19, 121) や ‘in the country of the Psalmist where the clouds drop fatness’ (Chap.28, 198) を引用することによって物語展開に変化をつけている。また、‘Saul at his reception by Samuel’ (Chap.26, 185) の引用は、サウルとヘンチャードの生き方を比較しながら、サウルからダビデへ、ヘンチャードからファーフレーへと大きく変化していく様子が明確な構図として作られ、ヘンチャードの破滅が暗示されている。

第五に、聖書を故意に曲解することにより悲劇性あるいは意外性を増幅している機能を果たしている。

‘some Tuscan painting of the two disciples supping at Emmaus’ (Chap.25, 180) と ‘coals of fire on my head’ (Chap.29, 208) はいずれもルセッタという女性に対して聖書からの引用がなされているが、神聖さの感じられない設定となっている。また、‘joy in heaven’ (Chap.40, 283) に関しては、一人の悔い改めは何にも増して喜ばしいものであるという聖書の言葉に対して、ヘンチャードの悔い改めには喜びが皆無であるとしている。さらに、‘my punishment is not greater than I can bear’ (Chap.43, 307) にしても、カインのような我慢できない罰でもヘンチャードは甘んじて受けると言う。聖書を異なった角度から捉え意外性や悲劇性を強調している例である。

以上見てきたように、ハーディーは *The Mayor of Casterbridge* において聖書引用を巧みに行き、適者生存の物語としての全体構成に有効な機能を果たすようにしつらえているのである。

使用テキスト

Thomas Hardy, *The Mayor of Casterbridge*, Penguin Classics, 2003.

トマス・ハーディ『カスターブリッジの市長』、上田和夫訳、潮出版社、2002。

The Bible, Authorized King James Version, Oxford University Press, 1997.

『聖書』新共同訳、日本聖書協会、2000。

引用文献

Thomas Hardy, *Tess of the D’Urbervilles*, Penguin Classics, 1985.

Thomas Hardy, *Jude the Obscure*, Penguin Classics, 1985.

参考文献

Richard Taylor ed., *The Personal Notebooks of Thomas Hardy*, The Macmillan Press LTD.

Thomas Hardy, *The Life and Work of Thomas Hardy*, Michael Millgate ed., The University Georgia Press, 1985.

Chambers English Dictionary, Chambers Cambridge, 1988.

世界の名著 39 ダーウィン『人類の起原』池田次郎、伊谷純一郎訳、中央公論社、1967。

大系世界の美術 16、『バロック美術』、学習研究社、1972。

世界美術大全集 16、『バロック美術 I』、小学館、1998。

図説『大聖書』講談社インターナショナル、1981。

世界文学大事典 3、集英社、1997。

聖書略語表：

Genesis (Gen.)	Exodus (Exod.)
1 Samuel (I Sam.)	Psalms (Ps.)
Matthew (Matt.)	To the Romans (Rom.)
Revelation (Rev.)	

(Received: September 30, 2008)

(Issued in internet Edition: November 1, 2008)